

20 聖マタイの殉教

2019

真鍋友範

* 《眼鏡の聖マタイ-143年後の真実-2013》より一部修正再録

~~~~~



図版 1

《聖マタイの殉教》 1599~1600 カラヴァッジョ

サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂 コンタレッリ礼拝堂

### はじめに

有名なカラヴァッジョの宗教絵画3部作が置かれているのは、ローマ市内、イタリア・バロック期の彫刻家ベルニーニ作《4大河の噴水》で有名なナボーナ広場に近しいサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂内のコンタレッリ礼拝堂だ。

西暦1599年から1600年にかけて制作した最初の2作品は、ともに画家カラヴァッジョにとって、社会へのデビュー作となる重要な作品だった。

また、デル・モンテ枢機卿という後援者によって聖堂の礼拝堂に掲げる2点

の絵画の注文を得られた結果でもあった。

その絵画とは《聖マタイの召命》と《聖マタイの殉教》（図版1）だ。  
2枚の絵画は、現在もコンタレッリ礼拝堂の左右の壁面に向かい合うようなレイアウトで配置されている。

向かって左側壁面には《聖マタイの召命》、右側壁面には《聖マタイの殉教》が掲げられている。どちらもフレスコ画ではなく、油彩画だ。

数年後、中央部に《聖マタイと天使》が《描き直し》という騒動の後に掲げられた。

以来約400年間、地元市民や教会関係者はもとより、この場を訪れた世界各地からの聖地巡礼者、あるいは旅行者などによって、これらの絵画は鑑賞され続けてきたのだ。

さて、対峙した作品《聖マタイの殉教》とは、どのような絵画だったのだろうか。

場面はエジプト王エピクロスの指示を受けた暗殺者によって、聖マタイが殉教に至る場面である。時代設定はカラヴァッジョの生きた初期バロック時代に置き換えられている。（図版1）

では、美術史研究者はこのストーリーをどのように解説しているのだろうか。  
まず、宮下規久朗氏が《カラヴァッジョ聖性とヴィジョン》（名古屋大学出版会 2004 P62 13~16）の中で【プトファーケン氏説として紹介する新しい解釈】に注目したい。

氏によると、【この場面は暗殺が完了した直後で、暗殺者達4人が逃げ出している場面であり、直後にキリスト教信者の蜂起した場面】だとする。

この解説によると、この中央の剣を持った若者は蜂起した信者の若者の1人であるのだが、そうだとすると、【この若者は、聖マタイを助け起こそうとしている】場面という解釈になる。

しかし、よく見ると【暗殺者の聖マタイに対する手首の握り方は、怪我人を助け起こす場合の握り方ではない】のだ。相手の動きを封じようとする手首の握り方なのだ。（図版2）



図版 2

【《聖マタイの殉教》（一部）より 暗殺者の手元の様子に注目。】

さらに【中央の裸の若者（写真3）がなぜか怒っている】という解釈だが、これも奇妙だ。聖マタイと同じキリスト教信者なら、怒りの表情を向ける対象が聖マタイである筈がないのだ。



図版 3

【（写真4）と表情を比較すると口元の表情に共通点が認められる。】

中央の剣を持つ洗礼式姿の若者の表情はルネサンス期にレオナルドの幻となったヴェッキオ宮（フィレンツェ・500人広間）に予定されたミケランジェロとの競作の壁画《アンギアーリの戦い》の下絵デッサンに残っている騎馬戦の戦士を思い起こさせる。その画中で描かれた戦士の表情に通じる、人と人が殺し合う場面での人間の迫力ある表情につながる表情なのだ。（図版4）

やはり暗殺者と解釈すべきであり、その表情は、自身を鼓舞するかのよう  
に心を高ぶらせて、暗殺の場面に臨んでいる表情なのだ。

《怒っている》という判断は全く見当はずれだろう。



図版 4

【《アンギアーリの戦いの下絵スケッチ》 レオナルド・ダ・ヴィンチ 1504】

次に、剣を腰に下げた人物の解釈について詳細に検討することにしよう。



図版 5

【《聖マタイの殉教》（一部）この人物の右手の様子に注目したい。】

プトファーケン氏はこの場面を、参列者が身の安全の為に剣を抜こうとしている動作ではなく、暗殺の剣を収めた直後の動作であると判断され、奥の画面のカラヴァッジョ似の人物たちと共に4名の暗殺者仲間と断定したと思われる。

しかし、仮に【剣を収めた直後の動作であるのならば、手のひらを剣の柄頭に重ねあてる動作は不必要】なのだ。

剣を鞘におさめたなら、すぐに柄から手を素直に離すのが通常イメージであろう。もう一度あなた自身が身体動作を再現しながら観察していただきたい。（図版5）

また、仮に暗殺団の仲間なのだとしたら、第一撃の段階から中央の洗礼者に化けた裸の若者ととも剣を抜いている筈なのだ。さらに暗殺が完了していないのに剣を鞘におさめるとも考えづらいのだ。

つまり、この2人と同じ場所に描かれている隣の同じサイズで描かれた2人と、奥の1名を含めた5人は皆、洗礼式の参列者達なのだ。】

暗殺者に剣を抜き取らせて（あるいは手渡して）から、第一撃の終了までには時間が経過している。参列者の一団に紛れ込んでいた暗殺者の仲間は、この時間を使って、既に出口に向かって逃げている様子の、【最も小さく画面奥に描かれたカラヴァッジョ似の人物こそ、中央にいる暗殺者の仲間】と考えられるのだ。

結論として、プトファーケン氏説は、この絵画の解釈として、かなり疑問が残る見解だ。

さて、私の考える《聖マタイの殉教》のストーリーは次のものだ。

洗礼式に参加した4名（あるいは5名）の若い洗礼志望者の中に紛れ込んでいた1人の暗殺者は、おそらく洗礼式開始を合図に、参列者にまぎれて待機していたカラヴァッジョ似の男に走り寄り、彼の腰の剣を抜き取り（あるいは受け取り）、振り返るやいなや聖マタイへと走り寄り、第一撃を加えた。（洗礼式開始直後である事は、まだ消耗していない長いままのロウソクの状態から推測できる。）

倒れた聖マタイの聖衣には血痕が見えるが、まだ致命傷には至らない。

暗殺者は彼の左手で、倒れた聖マタイの右手首を強く握り、その動きを奪いながら、右手の剣で第二撃によってとどめを刺そうと、鬼気迫る表情で相手を見すえた。

画面左にいる5人の参列者達の驚きは大きい。腰を抜かしそうな人物は両手を左右に広げ、全身で驚きを表現している。（図版6）



図版6

【《聖マタイの殉教》（一部）より 驚いて腰をぬかしそうになる参列者】

また別の逃げようとしている人物は、とっさに自分の身を守ろうと、剣の柄の位置を確認するために、右手をあてて探り、今にも剣を抜こうとしている。（図版4）

すでに暗殺補助の役割を終えた人物の、いち早く出口に向かって走っている姿が、距離をおいて画面奥に小さく描かれている。

暗殺の遂行状況に後ろ髪を引かれて振り返り、こちら側を見ているのは、《カラヴァッジョの自画像とされている暗殺者仲間の男》だ。前の人物の後ろに隠れてよくは見えないが、【彼の左手は、画面前方ではなく、左方の出口の方向に向かって水平に伸ばされているようだ。】

聖マタイが存命であることは、彼自身が左手で自身の体幹を支えている点と、

殉教を象徴するシュロが天使からマタイの手に渡っていない点、燭台のロウソクの炎がまだ燃え続けている点などにより表現されている。

従って、暗殺計画は現在進行中そのものであり、未完結なのだ。

それ故に【観衆は自分がその場に居合わせて実際に目撃しているような幻想を抱き、ストーリーに引き込まれる】のだ。ルネサンス期にはなかった種類の、実に革新的で躍動感あふれる絵画だ。

さて、【ストーリーの中で使われている暗殺者の持つ剣は恐らくカラヴァッジョが暗殺者役モデルに手渡した彼自身の剣だろうと推測できる。】その流れから、自然に彼自身が暗殺者に剣を手渡す仲間という役割の設定になったのではないかと類推されるのだ。この根拠として、カラヴァッジョが1610年に死刑宣告破棄の朗報を受け取り、ナポリから喜んでローマに船で戻ろうとした時に携えていたと言われる数点の作品のひとつ《ゴリアテの首を持つダビデ》（写真7）に見ることができる。この【ゴリアテの首のモデルとしてカラヴァッジョ自身を描いている】のだ。

【カラヴァッジョは、悪者あるいは憎まれ役側のモデルとして自身の自画像を描くことに躊躇しない画家】だった点はその根拠だ。

ルネサンス期の画家たちのように、自画像をサイン代わりに画中に描いていた例も多いが、カラヴァッジョの絵画表現のように、【ストーリー上で積極的な役割を担った登場人物として、自画像を描いている例はとても珍しい】のだ。



図版7

【《ゴリアテの首を持つダヴィデ》ボルゲーゼ美術館 ローマ 1610】

この画面は一瞬の描写に見えるものの、実は【事件前後の時間経過を包括する濃厚なストーリーと時間が描き込まれた絵画】なのだ。そして、カラヴァッ

ジョはこの技法を、レオナルドの《最後の晩餐》の表現から学んだと私は確信している。なぜなら、《最後の晩餐》に見られる十二使徒の演じる身体動作豊かなストーリー表現が、カラヴァッジョの《聖マタイシリーズ》に登場する人物達の身体動作に直接的影響を及ぼしているからである。

カラヴァッジョは《最後の晩餐》を超越したはるかに複雑なストーリー展開を内容とする《聖マタイシリーズ》を描いているのだ。

また、カラヴァッジョの自画像とされる画面奥の人物を、エジプト王エピクロスとする解釈もあるようだが、そのような危険な場所に王自ら現れることは考えられないことに加え、急いで逃げるような王らしからぬ身体動作やその質素な服装から、エピクロス王とする解釈には無理があると考えられるのだ。

さて、《聖マタイの殉教》の最大の謎は【カラヴァッジョ似の人物とその前の背を向けた人物、2人の間に存在する人物のように見える、もう1人の人肌風の色彩に描かれた第3の人物＝不明部分】と【下方に向かって開かれた《手のひら》は、どこにつながるのか】だ。

少なくとも、この《手のひら》は《カラヴァッジョ似の人物》の《手のひら》でも、背を向けて逃げる若者の《手のひら》でもなさそうだ。(図版8)

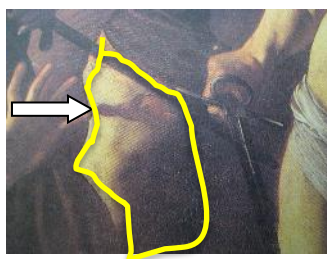
なぜならば、まず【《カラヴァッジョ似の人物》の下半身のように見える人肌風の不明部分は、《カラヴァッジョ似の人物》の下半身ではないのだ。】その理由は《両者の描写スケールが適合しないこと》にある。確信はないが、5番目の洗礼者かもしれない。

仮に洗礼者の下半身なら、白い腰巻きが描かれている筈なのだが、描かれていない。つまり洗礼者の下半身の完成された描写ではないのだ。

さらに、《カラヴァッジョ似の人物》と《不明部分》は位置関係が異なる。《不明部分》は前側に位置し、《カラヴァッジョ似の人物》の方は、奥側に位置しているのだ。

また背を向けて逃げる若者の《手のひら》ならば、手のひらは下向きでなければ腕が若者とつながらない。正しくは上向きにならないとつながらない為、両者はつながらないのだ。

結論として、《どういった内容がここに描かれているのか》が依然として謎なのだ。



図版 8

【 暗殺者の剣と参列者の右手の中間部背景にはいったい何が描かれているのだろうか。中央の矢印部分の手はどこにつながるのか。最も大きい謎の部分だ。】

カラヴァッジョは、この《聖マタイの殉教》を、契約より数ヶ月遅れて完成したという。【《カラヴァッジョ似の人物》の手前に位置する洗礼者が一旦描かれた後、時間不足等の理由により、描き直し作業が完成されないまま放置された状態とも考えられる】ものの、今後の研究課題だろう。

結論として《表現上の謎》が一部残るものの、《聖マタイの殉教》のストーリーについて、大筋では理解可能なのだ。